

高句麗社会の変遷

越田 賢一郎

目次

はじめに

一、五族・五部に関する各書の記事

二、那の意味と部への変遷

三、高句麗の王権について

1、高句麗における王の性格

2、官位制の変遷

3、地方支配形態の変化

四、那部から部へ——結びと今後の課題——

はじめに

七世紀頃のアジアを語るとき、唐帝国を中心とした東アジア世界の成立が指摘され、東北アジア方面では渤海がしばしば「東アジア世界」の一員とされている。しかし、このような設定は、それぞれの地域がどのような歴史発展をたどったかを考慮することなくしては、意味をもたぬものとなる。特に東北アジアは、中国と北アジアの乾燥地帯にはさまれた独自の一世帯ともいえるものであり、その歴史発展を追って、はじめて前述の設定が史的意義をもつであろう。渤海成立以前に、東北アジアで大きな勢力を持っていた高句麗は、夫餘とともに最も古く建国したものの一つである。高句麗社会が中国や北アジア社会とどのようなにかかわりつつ独自の発展を上げていったかを考察することは、東北アジアの歴史発展をとらえる重要な一課題であ

る。

高句麗の社会を考える上で、必ずふれなければならないのは、五族・五部の問題である。これに關してはすでに数多くの考察がなされているが、その論点を整理してみると

①五族と五部が同一、または連続するものかどうか。

②両者が異なったものであれば、変化のおきた時期はいつで、その理由は何か。

③『三国志』魏書高句麗伝にみえる「涓奴部」から「桂婁部」への王権の移動が何を意味するか。

といった問題点が指摘される。ところで、従来の論考では、五族・五部の考証に重点をおくのみ、この問題を高句麗社会の史的発展と関連させて把握することが軽視されてきたように思う。本稿では、高句麗の国家組織の整備と王権との関連を、五族・五部の問題からとらえていきたい。

ところで高句麗史研究の史料としては『三国志』を始めとする中国諸文献と、『三国史記』『三国遺事』という朝鮮の文献とがある。日本における従来の論考では、前者が重視され同一民族の手に成った後者が軽視されることがしばしばみられる。たしかに『三国史記』は十二世紀まで下って成立し、またその史料を多く中国史書によっている史書である。だが高句麗本紀(以後麗紀と略称する)を始め、

高句麗社会の変遷(越田)

中国史料にみえぬ記事が存在する。麗紀は内容上、第十五代美川王を境にして前後に区分でき、美川王以前は高句麗に関する独自の史料を中心に中国史料を取り入れているのに対し、以後はほとんどすべてを中国史料によっており、国内に関する記事ははなはだ少い。特に美川王以前の記事を論を進めていく上でどう取り扱っていくかが問題となるわけであるが、この部分を除外しては研究の進展は期待できまい。そこで本稿では、『三国史記』独自の記載中にあるような歴史事実が描かれているのかを検討しつつ考察を進めていく。

一、五族・五部に関する各書の記事

麗紀には、那・那部・部に關する記載がみられる。那名がつくものには、豫那部・沸流那部・桓那部・貫那部・提那部・藻那・朱那の七者がある。部名のみのものは、東部・南部・西部・北部・上部・下部の六者である。時代ごとに那部と部の出現状況をみると△表一Vのようになる。那名を持つ前七者は、第六代太祖大王から、第十二代中川王の間に集中的にみられる。(例外は第三代大武神王時の二例)一方、第十三代西川王以後は全くみられない。これに対して、部名のみをもつ六部は、第九代故国川王の頃から、

表一 那・那部・部出現表

『三

高句麗社会の変遷(越田)

王代	王名	年代	沸流那	貫那	掾那	桓那
1	東明聖王	BC37~BC19				
2	瑠璃明王	BC19~AD18				
3	大武神王	19~44	沸流部長		掾那部	
4	閔中王	44~48				
5	慕本王	48~53				
6	太祖大王	53~146	沸流那皇衣陽神	貫那部沛者達賈 貫那于台彌儒		桓那部沛者薛儒 桓那于台於支留
7	次大王	146~165	沸流那陽神(于台)	貫那沛者彌儒	掾那皇衣明臨答夫 沛者	桓那于台於支留 大主簿
8	新大王	165~179				
9	故国川王	179~197			四掾那	
10	山上王	197~227				
11	東川王	227~248				
12	中川王	248~270	沸流沛者陰友	貫那夫人	掾氏 掾那明臨勿祝	
13	西川王	270~292				
14	烽上王	292~300				
15	美川王	300~331				
16	故国原王	331~371				
17	小獸林王	371~384				
18	故国壤王	384~392				
19	広開土王	392~413				
20	長寿王	413~491				
21	文咨王	492~519				
22	安藏王	519~531				
23	安原王	531~545				
24	陽原王	545~559				
25	平原王	559~590				
26	嬰陽王	590~618				
27	建武王	618~642				
28	安藏王	642~668				

『国史記』による

王代	提那	東部	南部	西部	北部	上部	下部	その他	史
1									苑(第三十三卷一号)
2									
3			南部使者鄒救秦						
4									
5									
6								藻那	
7								朱那	
8									
9	提那部于秦之女								
10		東部晏留						四部	
11		東部密友 東部人組由					下部劉屋句		
12									
13				西部大使者于救之女					
14			南部大使者會助利		北部小兄高奴子				
15		東部蕭友			北部祖弗				
16									
17									
18									
19									
20									
21									
22									
23									
24									
25						上部高氏		五部兵士	
26									
27				西部大人蓋蘇文					
28			南部檀薩高思貞		北部檀薩高延寿				

『三国史記』高句麗本紀による

表二 高句麗重臣表

王名	年	左 輔	右 輔	中畏大夫	評 者	事 件
1 東明聖王						
2 瑠璃明王						
3 大武神王	8 10	乙豆智	乙豆智 松屋句			
4 閔中王						
5 慕本王						
6 太祖大王	71	穆度婁	高福章			
7 次大王	2	彌儒	[誅]			
		[貫那沛者]	[退]			
		於支留		陽 神		
		[桓那于台]		[沸流那于台]		
8 新大王	2	國 明 臨 答 夫	相 夫			
		[掾那沛者]				
	15	[死]				
9 故国川王				於界留	左可慮	王后于氏
	13	乙 巴 素	索	[提那?]	[提那?]	[提那部]
10 山上王	7	高 巴 優	婁			
	13	[死]				九郡遷都
11 東川王	4	明 臨 於 漱				
		[掾那?于台]				
	20	[死]				毋丘儉遠征
12 中川王	7	陰 友				
		[沸流沛者]				
13 西川王	2	尚 婁 (陰友の子)				王后西部大使
		[沸流?]				者于漱之女
14 烽上王	3	倉 助 利				
		[南部大主簿]				
15 美川王						倉助利美川王を擁立

第十五代美川王までに集中的にみられ、(それ以前は大武神王代の一例)第十六代故国原王(第二四代陽原王)まで空白があるが、第二五代平岡王(平原王)以後、滅亡の時まで再見する。全体として那名を持つものが古い方に集中し、四方・上下を冠する部名が outlook して出現するといえよう。

次に指摘しうるのは、部名はすべて人名に冠して用いられており、那名がみられる時代の部名を冠した人名は、王の側近として描かれていることである。また、四方を冠した部と上・下部という異った名称系統をもつものが並存していたことが、東川王二十年の条に東部と下部が同時に記されていることから指摘しうる。

では、『三国志』魏書高句麗伝所見の五族と前述の那部との関係はどうであろうか。

高句麗伝には、濊奴部・絶奴部・順奴部・灌奴部・桂婁部という五族があると記されている。本伝の原史料となつたのは、魏、景初二年(二三八)の公孫氏征討、正始五・六年(二四四・二四五)の毋丘儉による高句麗遠征の時に得た記録であろう。この時期は麗紀では東川王の代にあたり、那・那部名が多く見える時期である。高句麗伝の五族と、麗紀の那・那部が同一のものを指すことが充分考えられるのである。

高句麗社会の変遷(越田)

麗紀によって国政の中心となる官職名と、それにつく人名を追うと(表二V)のようになり、那名を冠した人名が多くその中にみられる。各那に盛衰はあるが、貫那・桓那・沸流那・掾那のものが、重要な官職についており、この四那が二・三世紀頃国内で勢力を持っていたことになっている。この他に高姓のもの、那名をもたないものがあるが、このうち何人かは王族のものと考えられる。四那と王族とを合わせて、中国人の日に五族としてとらえられたといえよう。五族は単に五行思想や中央と四方との関連だけでとらえられるべきものではない。五族の史的実態をこそ究明せねばならないのである。

次に部関係の史料を追ってみよう

日本の文献では、『日本書紀』『続日本紀』『日本後紀』『新撰姓氏録』に、高句麗の部名を冠した人名がみられる。これらの人々は、高句麗末から滅亡後にかけて日本に朝貢、あるいは帰化した人々である。この中には、前部・後部といった、『三国史記』にない部名がある。また、上部・下部の人名が多くみえる一方、東・南・西・北部を冠する人名はほとんどみえない。また、たとえば『後部王起』『前部高文信』(続日本紀に散見する)の如く、前・後・上・下部のものには王名がつくもの、高姓がつくものがある。『三国史記』(巻四五列伝五)温達伝の「上部高氏」に

相応しよう。さらに、日本の文献にみられる人名は、使者や帰化した有力者であることから、前・後・上・下の部名は、王都関係のものであることが推測される。

『三国史記』及び日本の文献にみえる部関係記事は断片的なものである。これに対して中国文献は部について一定の包括的記述をしている。

五部に関する記載は唐代にはじまる。『三国志』に五族の記事がみえてから、『宋書』『南齊書』『梁書』の各史書は、単に使者の往来を伝えるだけか、『魏略』又は『三国志』の高句麗国内関係の記載を若干加えるに留まっている。一方、六世紀中頃に成立した『魏書』には五族・五部についての記載が全くみられない。このことは高句麗国内に関する情報が、使者の往来という形でしか入らないためであって、五部の存在を否定することにはなるまい。『魏書』の内容が中国との往来記事が中心で、国内に関する記載は少く、かつ後者は多くを『魏略』又は『三国志』によっているからである。

唐初の史書に見える五部の記載は、隋から唐にかけての高句麗との戦斗を通じて得た新たな情報によるものである。三世紀より七世紀までの部関係記事が欠如していることについて、唐代の史家がこの空白をどう埋めるのかが一つの問題であつたのではなからうか。

東部之下。其国從事以東為首、故東部居上。

とあり、『五部皆貴人之族也』の前までは『魏略』の引用、『五部』以下は池内氏の説によれば『高麗記』によっている。この註で始めて五族と五部が同一視されている。

『後漢書』の註は

按今高句麗五部、一曰内部、一名黄部、即桂婁部也。二曰北部、一名後部、即絶奴部也。三曰東部、一名左部、即順奴部也。四曰南部、一名前部、即灌奴部也。五曰西部、一名右部、即消奴部也。

とあり、これは『翰苑』の註を簡略化したものである。同様の記載は、九世紀初頭に成立した杜佑の通典にもみえる。池内氏によれば、『翰苑』註所引の『高麗記』は高句麗滅亡前に成立したといわれる。すると、上述した『翰苑』『後漢書』註、『通典』は、『高麗記』をもとに書かれたものといえよう。

『旧唐書』及び『新唐書』の五部に関する記載は、高句麗滅亡後の処置に関する部分に、

高麗国旧分為五部。有城百七十六、戸六十九萬七千。乃分其地、置都督府九、州四十三、縣一百。又置安東都護府以統之。

と記されている。両唐書は明らかに五部を国内の区分として扱っている。

高句麗社会の変遷(越田)

『隋書』『北史』はともに七世紀前半に成立したものである。『隋書』には官位十二等に続けて、

復有内評外評五部褥薩

とあり、『北史』にもやはり官位の記載に続けて、

復有内評五部褥薩

とある。両書では五部が五族とは全く別個のものとしてあらわれている。

次に五部に関する記載がみえるのは、『翰苑』の註及び『後漢書』の章懷太子註である。『翰苑』は張楚金によって高宗顯慶五年(六六〇)に撰述された。その註は雍公徹によっているが、彼は同時代または少し下った頃の人らしい。章懷太子は高宗から武后時期の人である。要するに両者の註はほぼ同じ頃に成立しているわけである。

『翰苑』では、『部貴五宗』に註して

魏略曰。其国大、有五族。有消奴部、絶奴部、順奴部、灌奴部、桂婁部。本消奴部為主。稍微弱、桂婁部代之。五部皆貴人之族也。一曰内部、即後漢書桂婁部、一名黄部。二曰北部、即絶奴部、一名後部、又名黑部。三曰東部、即順奴部、一名左部、或名上部、又名青部。四曰南部、即灌奴部、一名前部、又名赤部。五曰西部、即消奴部也。一名右部。其内部姓高、即王族也。高麗称無姓者、皆内部也。又内部雖為王宗、列在

以上検討したところによれば、五族と五部とは本来全く別のものでして記されており、『高麗記』が両者を結びつけた最初の文献になるわけである。

朝鮮及び日本の史料によれば、部には、東・南・西・北を冠する部と、前・後・上・下を冠する部とがあり、両者は意味を異にする可能性があることはすでに指摘した。これと対比する意味で『翰苑』註にみえる五部の名称を整理したものが表三である。一般に五部といえは表のIの系統を指すことに問題あるまい。IIの右部は下部といいかえられると考えられるから、この系統は日本の史書に多くみえる名称と一致する。『翰苑』註等では、IIがIの別名となっているが、本来IとIIは別ものを意味したのでは

表三 五部の名称 (翰苑卷二〇註による)

I	II	III	IV
内部	後部	黄部	桂婁部
北部	左部	黑部	絶奴部
東部	上部	青部	順奴部
南部	前部	赤部	灌奴部
西部	右部・(下部)	(白部)	消奴部

あるまいか。この点は、さらに考察を進めた後にもう一度ふれてみよう。

二 那の意味と部への変遷

『三国志』魏書高句麗伝によれば、那は奴字でおきかえられている。白鳥庫吉氏は奴を四方をあらわすものとするが、那と同一だとすると、麗紀には那名が四つ以上あらわれており、方位と関係させるとおかしいことになる。これに対して三品彰英氏は、那は土地を意味したものであり、古代小国家的機能をもつ地縁集団であるとする⁽⁹⁾。これが最も妥当な説と考えられるが、さらに麗紀の地方経略記事の中から那について考えてみよう。地方経略記事の多くは太祖大王以前に集中していて、事実をそのまま伝えるものであるかどうかは疑わしいが、その内容は大きく次のようにわけることができる。

- ① 集団をそのまま維持させ、その長たるものに官位を授けているもの⁽¹⁰⁾。
- ② 郡県又は城邑とする方法で、集団を改編していくもの⁽¹¹⁾。

①は王の存在が認められる地域集団であり、高句麗に服属してからは、官位を与えられ、中央とつながりをもっている。

領有地として、那部・王族に与えられている。東・南・西・北といった方位を冠した部は、このような新支配地を支配していくために、王を中心として作り出された地方支配機構であったと考えられる。従って那部と部とは地域を異にして同時に存在していたものである。

しかしながら、すでに指摘した如く、時代的には部が那部において出現し、那部が消滅していく現象がみられる。この原因として、一つには当時の高句麗がおかれた国際情勢が、二つには高句麗国内における支配層の勢力関係の変化があげられる。

三世紀から四世紀にかけて、高句麗は大きな国際変動の渦中に巻き込まれていく。後漢末の動乱は、公孫氏の遼東・朝鮮方面支配を残した。夫餘・高句麗・朝鮮諸国が直接接触するのは公孫氏となったわけである。東夷と公孫氏の関係、さらに魏・呉の対立が東夷の世界を巻き込んでいく。呉は公孫氏や高句麗と結び魏を挟撃せんとする。この企ては失敗に帰したが、これに対する魏の動きとして景初二年(二三八)の公孫淵征伐があり、さらに毋丘儉の高句麗遠征がある。毋丘儉の遠征は遠く沃土方面にも達しており、高句麗の本拠である丸都城方面はかなりの損害がみられた⁽¹²⁾。三世紀後半から四世紀中頃にかけては中国本土に北方・西方民族が侵入する時であり、半島方面経営はおろそ

る。那とはこのような王の存在が考えられる地域的な集団であり、この勢力が王権と結びついた時に、那部として地方区画的要素を持つようになったものである。有力な那は早くから王族と連合して勢力を伸ばし、自己の土地を守るとともに、王とともに地方へも進出していった。このような那部の長が大加であり、那の時代における王であると推定される。

『三国志』魏書東夷伝により、当時の東夷社会をとらえてみると同書東沃沮伝・濊伝等には、渠帥を中心とした邑落がみられる。そして渠帥が統合し合い、相互の差を生み出すことによって大加があらわれ、小渠帥は小加と呼ばれ大加を中心にして地域的に集団を構成していったとみられる⁽¹³⁾。これが五族と呼ばれるものであり、麗紀の那である。

このような地域的集団が集まって、その中の有力者を王とし、連合して高句麗国を形成していたのである。(地域的には高句麗の中心と考えられている、修佳江から鴨緑江方面にあたるであろう。)

②は①に比べて自立性の弱いもので、いずれも官位は与えられていない。これらは主として新たに支配下に組み入れられていった地方で、①に比べより直接的な支配が行なわれた。これらは王の領有する土地となり、食邑・王族の

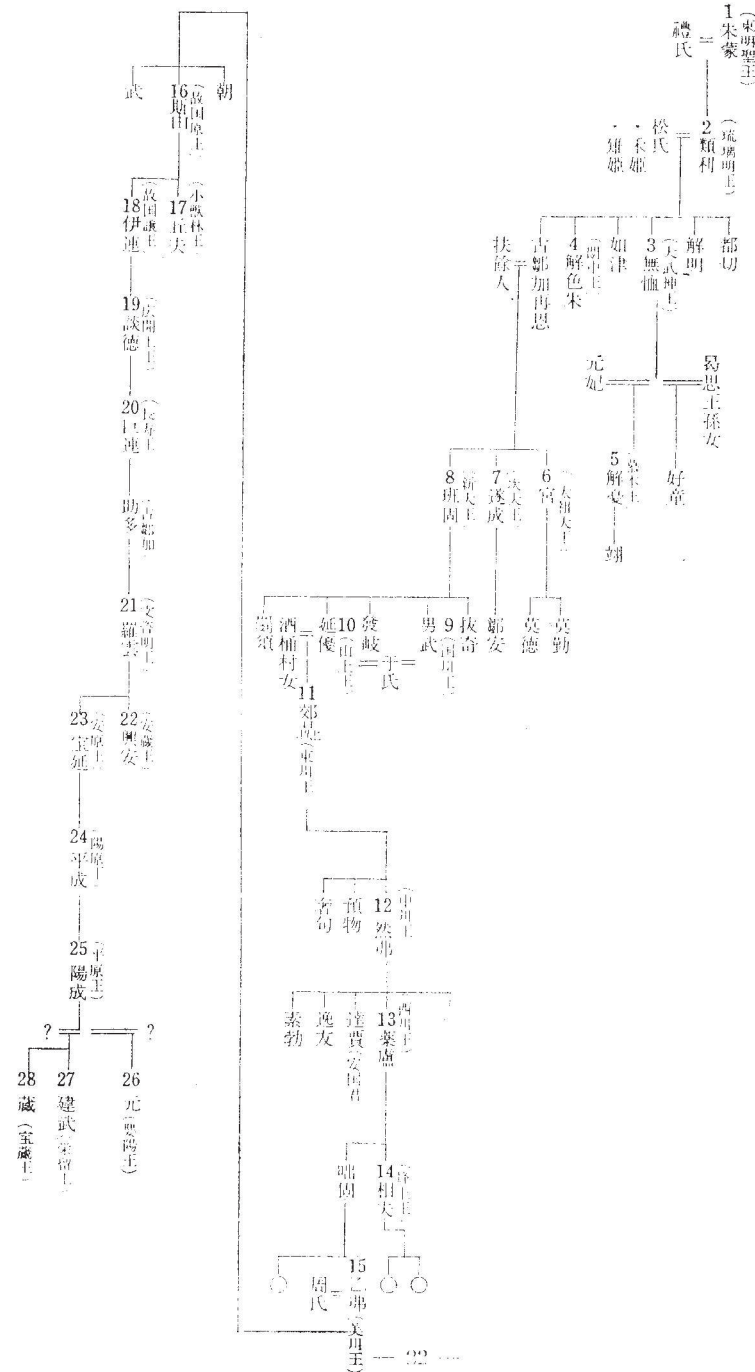
かとなり、高句麗はこの間約半世紀にわたって鮮卑と戦うこととなる。

一方、国内では伊夷模による丸都遷都が二世紀末に行なわれている⁽¹⁴⁾。王都の移動は、旧来の土地を離れることを意味し、社稷・宗廟を始めとして、中央貴族・一部の下戸層の移動を含むと考えられる。特に那部の構成員にとっては基盤となる土地を動くことは大きな問題となる。従って王都の移動は王権を強化する為の手段となりえよう。

那部の勢力は、新都遷都・対外戦斗により次第に弱くなる。一方、この時期は新たに領土を南方へ広げる時期であり、部制は次第に整備されていったと考えられる。那部の弱体化と王を中心とした部制の確立が、やがて那部をも部へ組み入れることとなり、那名が消えていくのであろう。この変遷の時期は三世紀後半頃に求められよう。

三 高句麗の王権について

高句麗における那から部への変遷が、三世紀の後半に求められることを述べた。ではこの変化がどのように高句麗の国家機構に反映されるであろうか。王の性格・官位制・地方支配機構の面を取りあげつつ、部との関連において考察を加えよう。

表四
高句麗王世系

麗紀の前半部には、王の交代時に継承問題がおこる例が

麗紀の前半部には、王の交代時に継承問題がおこる例が

人による王の共立が記されており、次大王、新大王、故国川王、山上王が即位する際事件がおきてゐる。中川王の時にも王弟の謀叛がみられるなど、王弟の力がかなり強く、王位継承争いも兄弟間のものが多い。世系をみると八表四ノ山上王までは兄弟相続の傾向がみられる。相続争いが、この相続形態と結びついていることがわかる。これと関連して、國人と呼ばれるものが、王位継承の際力を持つてゐる。王が変わる際に高官が変わる例がかなりある。また高官につくものは那部のものが多く、これは那部勢力の消長が王の継承と密接にかかわつてゐることを示している（表二参照）。國人とは各那部の有力者で、かつ官につきうるものの一般称であり、従つて國人による王の共立は、那の勢力と王権が結びつてゐる場合に可能である。（『三国志』魏書高句麗伝にも、國人による伊夷模共立の例がみられる。また同伝に伊夷模と王位を争つた抜奇とともに、冒奴加が活動したことが記されており、王位継承と関連して國人層同志の争いが起つてゐる。このような王のあり方及び王権をめぐる國人のあり方は、那部連合（五族連合）の形を暗示する。三世紀頃までの高句麗では、那部の力が強

く、那部の勢力関係によって王位も變動をきたす状態であつたといえよう。

の王統の變化は、このような状況下でどのように理解されるだろうか。那珂氏は、『三国史記』には朱蒙建国以来易代のことなく、消奴部本国主とは、沸流王松讓のこととした。⁽²¹⁾これに對し白鳥氏は易代のないことを肯定しつつも、五族を地方區画ととらえたために、伊夷模による九部遷都を意味すると考えた。⁽²²⁾池内氏は五族を部族とみなし、王統の變遷は宮代にしか考えられないとする。⁽²³⁾三品氏は那を部族とし、王統の變遷は實際にはなく、王をとりまく貴族の變遷であるとし、伊夷模の新都建設に際する消奴部のおす抜奇と桂婁部の争いを指すと考えた。⁽²⁴⁾金哲竣氏は三品説に反論し、伊夷模の事件は桂婁部内の紛争にすぎず、消奴部（松讓）から桂婁部への変遷は、部族連合の盟主の地位の移動で、太祖大王の時におこったとする。⁽²⁵⁾五族をどのように意味づけるかによって、この問題についての解釈が異なるわけであるが、文面通りに受けとれば王統が変わったことを意味する。これを麗紀の記載に求めれば、太祖大王以外に考えることはできない。⁽²⁶⁾

な争いは他王の時にはみられる。この二人の争いだけを王統の変化とみることはできない。宮王の時に、那部を統合する形で存在していた王が、消奴部から桂婁部に移ったとする金氏の意見に賛成である。ただ、宮王以前にも那部連合があったとするより、桂婁部がそれまで勢力を有していた消奴部を討ち、また他部をも合わせて那部連合の形を作りあげたのであろう。このことは、那名が太祖大王代より多く現われることからうかがえる。この時期に地方経略記事が多いことも那部連合の成立を裏付けるものではなからうか。消奴部が具体的に何を指すか明らかにしえないが、始祖説話中にみえる松讓の如き勢力であらう。

ところで、三世紀後半に那部が部に移りかわっていく状況と、王の性格の変化とは密接に関連していると思われる。三世紀以後は、高句麗が国力を国際関係に向けねばならぬ時期であり、それだけ国としてのまとまりを必要とし外交面に重きをおかねばなくなる。この時期こそ、国人に共立される王からの脱皮が必要であり、王を中心とした支配機構が必要な時である。

麗紀によって山上王以降の王系をみると、烽上王から美川王が弟の子に移っただけで、他は父子相続となっており、山上王までの兄弟相続と対照的である。父子相続をするためには、太子制が守られることが必要であるが、それ

には那部連合の形がくずれ、国人層をおさえていくものの出現が必要となる。即ち王権の拡大であり、王族の処遇が安定し、王を中心とした支配機構の整備がみられていく。(後述2・3)

麗紀において、独自の国内関係の記事が激減する美川王から滅亡時にかけて、王の性格に関する記事はみられなくなる。だが、桂婁部王権は、七世紀には泉蓋蘇文を始めとする泉氏によってくずされており、王権が絶対的なものであったとはいえない。

2. 官位制の変遷

高句麗の官位制について『三国史記』には独自の記載がほとんどない。そこで中国の文獻にみえる官位についてまとめたのがA表五である。『三国志』魏書高句麗伝の記載は、『後漢書』『梁書』『南史』に踏襲されており、南朝の史書には、朝貢関係などを通じた新しい情報による官位記事はみられない。いずれも三世紀以前に知られた官位名をそのまま記したにすぎないものである。

一方、『魏書』の記事は璉(長寿王)代のこととして官位名を記している。これは璉の頃から盛んとなった朝貢関係により、新たに得た情報によるものであろう。この記載に近いのは、『周書』『隋書』『北史』といった唐初に成立

表五 官位表

新唐書	卷220	苑	朝	卷30	北	隋	周	書	後漢書	國志	三卷
盧	折	大吐	吐	捍	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
對	控	大對	大兄	大兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
摠	(主圖簿者)	大兄	大兄	大兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大	大	大	大	大	兄	兄	兄	兄	兄	兄	兄
大											

した北朝関係の記載である。内容は各書で若干異なっているが、六世紀から七世紀にかけての官位名を示している。また、『高麗記』を引用した『新唐書』の註は、高句麗滅亡に近い頃の官位名を伝えているとみられ、高句麗の最も完成された官位制である。だが、官位名に別名が多いこと、また前の北朝関係の各書及び後の『新唐書』と比べかなり官位名が異なっていることからみて、変動がはげしかったことが推測される。

『三国志』魏書高句麗伝にみえる官名と、後の官名を比較すると、對盧・古鄒加とともに、使者・皂衣・先人の名称が残っており、一方新たに兄字のついた官位名が出現している。これらの点に注目して、麗紀の官位関係の記載と比較して考察してみよう。

使者は『三国志』魏書高句麗伝によれば、王族と大加のもとにもなされている。同書東沃沮伝には、句麗復置其中大人為使者、使相主領。

とあり、新たな支配地に土着の有力者を使者としておき、その地を統治していたことがわかる。同書夫餘伝にも官位名として、大使・大使者・使者といった名をみることができ、高句麗の使者と同様な役割をもつものである。麗紀にみえる使者名は、いずれも東・西・南部名を持つものにつけられている(表六・七参照)。先にこれらの部

が王を中心とした地方支配機構であると考えたが、そこにみられる官名が使者であることは、東沃沮伝の記載とともに、使者が地方支配をになうものであることを思わせる。しかし、使者は各族(那)の大加の下にもおかれていたわけであり、各那においてもそれぞれ使者が存在し、那の土地を支配していたわけである。だが王を中心として記されている麗紀にみえる使者は、主として王のもとにおかれた使者とみるべきであろう。一方、麗紀中に『魏書』以後あらわれる大兄・小兄・大使者等の官位名がみえるのは、いずれも東・南・西・北部であり、那部のものにはみられない。官位の変化が王の直接支配機構の中から進んでいったといえよう。

麗紀には使者・大兄・小兄といった官位名が方位を冠した部にみられるのに対し、沛者・主簿・子台(『三国志』魏書高句麗伝の優台にあたる)という『三国志』で高位におかれている官位名は、いずれも那部のものにみられる。方位を冠した部のものがこのような官位を有するようになるのは、第十四代烽上王の時、倉助利が大主簿となるのが最初である(表六参照)。このことは、高い官職、高い官位に那部関係のものだけがついていた時代から変化し始めたことを示している。

那部が第十二代中川王の時で消え、第十三代西川王の時

表六 官職官位と那部・部との関係 1 『三国志』高句麗本紀による。

代	沛者	主簿	子台	使者	皂衣	大兄	小兄
1							
2							
3				南部使者			
4				鄒教素			
5							
6	貴那沛者 達賈		子台頭				
7	恒那沛者 薛儒		貴那子台 儒				
8	沛者程度塞 左輔		恒那子台 支留				
9	貴那沛者 儒		沛流那子台 陽神				
10	恒那大主簿 於支留		中畏大夫				
11	抹那沛者 明臨答夫						
12	子台 沛者於界留		子台乙巴素 中畏大夫				
13	沛者得來		子台明臨 於激				
14	沛流沛者 陰友						

表七 官職官位と那部・部との関係 2

『三国史記』高句麗本紀による

代	沸流那	賈那	掾那	桓那	提那	東部	南部	西部	北部
1									
2									
3							使者鄭致素		
4									
5									
6	邑衣陽神	沛者達賈 于台彌儲		沛者部儒 于台於支					
7	于台陽神 [中畏大夫]	沛者彌儲 [左輔]		大主簿 [左輔]					
8			邑衣明臨 答夫沛者 [國相]						
9					於畏留? [中畏大夫] 左可慮? [評者]	大使者 晏留			
10									
11			于台明臨 於激 [國相]			九使者 紐由 大使者 多優			
12	沛者陰友 [國相]		明臨勿說 [驛馬都尉]						
13	尚妻 [國相]							大使者 丁漱	小兄 高奴子 大兄
14							大使者 倉助利 [國相] 大主簿		
28							高惠貞 [評者]	蓋蘇文 [莫離支]	高延寿 [撫薩]

には西部大使者丁漱の女が王后となり、第十四代烽上王の代には南部の倉助利が太主簿の官位を得、国相となっている。また、小兄・大兄という官位名があらわれるのも第十四代烽上王の時である。このような現象をみると那部が中心となってきたのは中川王代以前で、それ以後は部が中心となってきた。官位の在り方が変化していくのは、まさにこの那部から部への時期にあたっているのである。那部のみに与えられていた官位は、部にも与えられるようになり、さらに新たな官位名が出現してくる。使者が後に分化していき、かなり高位のものにも使者という官位名がみられるようになるのは、部が国内で次第に重要な位置をしめるからであり、兄の分化とともに那部のものを部へ組み入れて官位名を与えるためであろう。このような官位制の変化は、那部の部への吸収、即ち王権の拡大による地方統治の一本化を示している。

3. 地方支配形態の変化

以上述べてきた王の性格・官位制の変化は、地方支配形態の変化に裏付けられていると予想される。

三世紀頃までの地方支配形態は、『三国志』魏書東沃沮伝にみることができる。これによれば、新たな支配地には土着の有力者を使者としておき、各邑落を管轄させ、さら

に王の宗族の大家がこれらをまとめて租税を管轄していたのである。麗紀によれば、当時の地方支配は投降した集団をそのまま維持させ、その有力者に中央の官位を与えることによって支配下に組み込んでゆく那部の如き場合と、投降した集団を郡県・城邑として分轄し、使者をおいて支配する部の場合があった。東沃沮の場合は後者に属する。

高句麗の本土ともいえる沸流河・丸都方面では、那部・王族が使者・邑衣・先人といった官を通して自らの土地を支配していた。支配機構の末端は、邑落又は邑落をいくつか統合したものの長、つまり諸加で、使者以下の官位を与えられたであろう。新たな支配地の獲得による部制の整備に反し、新都遷都、対外戦斗により那部の力は弱くなり、那部の土地も部制に組み込まれ、王が直接諸加に結びつくようになった。これが王の性格が変化していく時期であり、官位名が変化していく時期でもある。また王を中心とした地方支配の整備は、軍事力の集中ともなり、鮮卑との対決を切り抜け、広開土王、長寿王代における領土拡大へとつながってゆく。新羅・百済との対立もこのような国内整備を基礎に可能であったのである。

長寿王代における平壤遷都は、高句麗の国内統治方式の完成された現象であると考えられる。王が土着の土地を離れ、経済的・外交的・軍事的・文化的拠点ともいえる平壤

に都を移すことは、対外的な意味の外に、国内における支配機構の整備が行なわれ、古い規制が打破されたことを意味する。遷都にともなうて国の中心がかわったわけで、この時に地方支配制度が変化したことが予想される。この制度を明らかにするには、隋唐代の高句麗国内の状態から、五部が何を意味するかを考えていかねばならない。

高句麗滅亡時に国内が五部にわかれ、州・郡・県が城を単位としておかれていたことは両唐書の記載より明らかである。また、各書の地方官職をみると、各城にその規模に応じた官がおかれていたことがわかる。五部とはこのような城を区分しているものと考えられる。一方、『隋書』には、

復た内評・外評・五部とに褥薩有り

という文がみられる。この意味についてはいろいろ論議されている。詳しい論議ははぶくが、これは、内評・外評・五部にそれぞれ褥薩がいたことを示す。内評は王都近くの軍事的拠点、外評は各地方における軍事的拠点であり、『翰苑』註・両唐書にみられる大城にあたる。五部はこれに対し、州県全体の区分となるものであり、形式的な面が強い。褥薩とは矢沢氏の指摘のように軍事的側面の強い官職である。⁽³²⁾内評と外評の褥薩は各大城に、五部の褥薩は内評・外評を統轄する形で平壤におかれたのではなかろうか。

このことは大城の褥薩を始め、その他の諸城の官が上層のものと考えられるのに対し、五部の褥薩は高姓を有することなど中央の貴族が任命されていることからいえる。方位名を冠した部名のつく人名は、五部の褥薩に対して与えられたのではなかろうか。

ここにあらわれた城とは、『広開土王碑』に村とともにあらわれる城と同じ意味をもち、地域集団の一単位となっている。城とは、いくつかの邑落が統合し防禦施設を作っていたものであり、高句麗支配下において地方支配の拠点となっているものである。村は邑落がそのまま存続したもので、城に支配されていく小集団である。このような城村が形成されるのは、『三国志』魏書東夷伝に記されている時代からで、那部が消滅していく三世紀後半頃には確立したと思われる。このような城・村を単位とする地域集団形態は、その後の朝鮮半島の社会構造を規定していくものと思われる。同時にこの形態は、朝鮮農耕社会のみならず、勿吉・靺鞨・渤海等の農耕・牧畜・狩猟・漁撈種族の活動する東北アジア社会に広く適用されるものと思われる。

四 那部から部へ——結びと今後の課題——

五族(那部)と五部(部)とは発生を異にするもので、

がそれぞれ祖先の説話を有していたことは、日本の豪族の例からいって充分に考え得ることである。当時、『三国志』が高句麗内で読まれていたことは明らかであり、日本の系統の部名をもつものが、それぞれ自らの始祖を桂婁部を除く四族に結びつけたのではなかろうか。

以上、高句麗の歴史を那部から部への変化を通して述べてきた。しかし、史料が限られていることもあり推測の連続となってしまうことは否定しえない。特に五部については未詳の点が多い。また今後の研究の上で、ここに取り上げた高句麗の歴史が、朝鮮史・東北アジア史の中にどのような位置づけられるのかという問題点を抜きにすることはできない。その場合、文献が支配者層の残したものであるという限界を越えるためにも、考古学・民族学等からの歴史像再構成を行っていく必要がある。

註(1) 那珂通世『高句麗考』(『史学雑誌』五一九一八九四)

白鳥庫吉『九部城及国内城考』(『史学雑誌』二五、四、五、一九一四)

今西龍『高句麗五族五部考』(『史林』六二、三、一九二二)

『朝鮮古史の研究』所収、

池内宏『高句麗の五部及び五族』(『東洋学報』一六、二、一九二二)

『満鮮史研究』(上世編)所収、

矢沢利彦『高句麗の五部について』(『埼玉大学紀要』

『三国志』の五族と、唐代以降の五部とを同一視したのは『高麗記』に始まるものであった。那部とは王とともに中央を形成した地域的集団であり、部とは新支配地における王を中心とした地方支配機構であり、三世紀頃那部の力がおとろえ部へと組み入れられていった。この変化の原因は、支配地域の拡大、城・村の確立、対外的には魏・鮮卑との対決にあり、王を中心とした国内統一が必要とされたのである。部への変化、つまり城・村の王による統治は、官制の変化としてあらわれ、王の性格を変えていく。この変化の帰結として、広開土王・長寿王代における疆域拡大があり、平壤遷都がある。この時に唐代にみえる五部の制を始めとする国家機構がほぼできあがったのであろう。

最後に、唐代の五部が、何故五族と同一視されたかについて若干ふれてみよう。

五部にはIとIIの二系統があり(表3)、Iは地方区画を意味し、IIは王都方面のものらしいことを指摘した。IIは内部の区分、即ち王都の地域的区分、又はそれに伴う王族又は貴族の区分とし、方位を冠した四部を管轄していたと考えられまいか。IとIIが混同されたのは両者にこのような関係があったためとみたい。次に五族と五部が混同された理由であるが、高句麗高慈墓誌銘中に、祖先の功業を記した氏の始祖説話とも言うべきものがある。貴族

人文社会科学編三、一九五四)

三品彰英「高句麗の五族について」(『朝鮮學報』六、一九五四)

鄭早苗「三国時代の国家構造」高句麗の王権(『朝鮮史研究會会報』二九、一九七二)等があげられる。

(2) 中国史料の高句麗に関する伝を抜き出すと次の如くである。

『三國志』卷三〇、魏書、東夷伝、高句麗

『後漢書』卷八五、東夷、高句麗、句麗

『宋書』卷九七、夷蛮、東夷高句麗国

『南齊書』卷五八、東夷高句麗国

『梁書』卷五四、東夷、高句麗

『魏書』卷一〇〇、高句麗

『周書』卷四九、異域上、高麗

『隋書』卷八一、東夷、高麗

『南史』卷七七、夷蛮下、高句麗

『北史』卷九四、高麗

『旧唐書』卷一九九上、東夷、高麗

『新唐書』卷二二〇、東夷、高麗

『翰苑』卷三〇、蕃夷部、高麗(廣文書局本による)

『通典』卷一八五、边防二、高句麗

以後、各書を引用するときは、特別断わらぬかぎりの部分である。

(3) 三品彰英「三国史記高句麗本紀の原典批判」(『大谷大学研究年報』六、一九五三)

(4) 『三国史記』卷一七、東川王二〇年の条にみえる、東部密友、下部劉屋句、東部人紐由は、戦闘の際にも王と行動をとりにしている。また、同書卷一六、故国川王三年の条にみえる東部晏留も、この例ほどはきりきりしていないが、四椽那の謀叛をおさえた後で出てくる人名だけに、那部のものより王に身近なものと考えられる。

(5) 提那部のものもいるが、この部は一時的であるし、椽那部の誤りであるとの説もあるので含めない。

(6) 池内宏、前掲論文

(7) 池内宏、前掲論文

(8) 『旧唐書』卷三九、志一九、地理二、安東都護府

『新唐書』卷四〇、志二〇、地理、安東都護府及び前述の部分にもみえる。

(9) 白鳥庫吉、前掲論文

(10) 三品彰英(一)の論文

(11) 『三国史記』卷一三、始祖東明聖王二年、夏六月、卷一五、太祖大王一六年、秋八月、二〇年、春二月、二二一年、冬一〇月の各条。

(12) 『三国史記』卷一三、始祖東明聖王六年、冬一〇月、一〇年冬十一月、卷一四、大武神王九年、冬一〇月、卷一五、太祖大王四年、秋七月の各条。

(13) 『三国志』魏書東夷伝の社会構成については、武田幸男「魏志東夷伝にみえる下戸問題」(『朝鮮史研究會論文集』三、一九六七)にくわしい。若干異論はあるが、ここではふれない。

(14) 『三国志』吳書卷二、嘉禾二年の条

『三国志』魏書卷三、青龍四年、景初元年の条等

(15) 『三国史記』卷一七、東川王二一年の記事は九都城にかなりの損害があったことを意味しよう。

(16) 『三国志』魏書東夷伝、高句麗

『三国史記』卷一六、山上王一三年、冬一〇月の条

(17) 『三国史記』卷一四、閔中王、卷一五、太祖大王、卷一六、故国川王

(18) 故国川王

(19) 『三国史記』卷一五、太祖大王八〇年、八六年、九〇年、九四年、次大王三〇年、冬一〇月、卷一六、故国川王、山上王

(20) 『三国志』卷三〇、魏書東夷伝、高句麗、本捐(消)

奴部為王。稍微弱今桂婁部代之。

(21) 那珂通世、前掲論文

(22) 白鳥庫吉、前掲論文

(23) 池内宏、前掲論文

(24) 三品彰英(一)の論文

(25) 金哲垓「高句麗・新羅の官階組織の成立過程」一九五

六(李達憲・三品彰英抄訳『朝鮮研究年報』一、所収、高句麗社会の変遷(越田)

一九五九)

(26) 宮に関する麗紀の記事には、王統の変化を考えさせるいくつかの点が指摘できる。一つには、名が太祖大王とされ、祖字が用いられていること。一つには、五代慕本王から急にいとこにあたる宮へとんでいることである。さらに氏の起源がすべて慕本王以前にあり、宮王以後にはみられぬこと、那名が宮王以降に多くみえるようになることがあげられる。太祖大王までは始祖説話と結びついたものであり、これに対し太祖大王以降はある程度実在した王をもとに書かれたものと考ええる。

(27) 『三国志』魏書東夷伝、高句麗

大加亦自置使者・皂衣・先人。名皆達於王、如卿大夫之家臣。會同坐起不得與王家使者・皂衣・先人同列。

(28) 同書、東夷伝、夫餘

皆以六畜名官。有馬加・牛加・猪加・狗加、大使、大使者、使者。

(29) 同書、東夷伝、東沃沮

句麗復置其中大人爲使者、相主領。又使大加統責其租賦。貂布・魚鹽・海中食物・千里擔負致之・又送其美女、以爲婢妾、遇之如奴僕。

(30) 『旧唐書』卷三九、志一九、地理二、安東都護府には「高麗本五部一百七十六城」とあり、同書卷一九九上、列伝一四九上には、「外置州縣六十餘城」とある。

(31) 今西龍・池内宏の前掲論文では、内評・外評を、州県

全体を指すものとされるが、石母田正『日本の古代国家』(一九七二)が指摘される如く、軍事的拠点となる特殊な州県であると考ええる。

『翰苑』卷三〇 高麗条では「官崇九等」註に、

又其諸大城置傳薩、比都督

とあり、このことを裏付けよう。

(32) 矢沢利彦、前掲論文。

(33) 『新唐書』等にみられる烏骨城傳薩はこのようなものを指していよう。

本稿は立教大学大学院史学専攻修士論文として提出した「渤海成立以前の東北アジア——高句麗を中心として——」を高句麗について抜萃し要約したものである。また昨年十月九日に開催された朝鮮史研究会第八回大会における鄭早苗女史の報告「三国時代の国家構造——高句麗の王権——」は筆者の論旨と共通するところ多く、大いに啓発されるものがあつたことを附記しておく。

(一九七二年立教大学文学研究科修士課程修了)